

五月 月次祭神殿講話

五月の月次祭を皆様と共に勇んでつとめさせていただきました。ありがとうございます。また、本日は教祖百四十年祭一斉巡教でありましたので、大教会役員・旭都分教会長 藤崎実先生にご巡教いただき、年祭活動の歩み方について、論達第四号の意味合い、大教会の活動方針などお話をくださいました。

特に、祝梅分教会としては、「教祖のひながたを定規として 喜び心で通ろう」を目標にしたいと思えます。喜び心はまさに太陽の心。明るく大きく丸い心かと想像致します。また、暖かい心でもありません。この教祖百四十年祭に向かう三年間は、お互いが、認め合い、補



発行所

天理教祝梅分教会

千歳市祝梅 598

☎0123-29-2055

復刊第二十六号

い扶け合い、喜びあえる日々を過ごさせていただきましょう。教祖はその日々をご覧になり喜んでくださると思います。

親である親神様は子供である私たち人間に多くの御守護をくださっています。変わらぬ御守護、そして不思議な御守護を喜ばせていただきましょう。そして、親神様に喜んでいただけるように成人させていきたいと思います。本日はありがとうございました。

布教の家週報録より

四月十五日

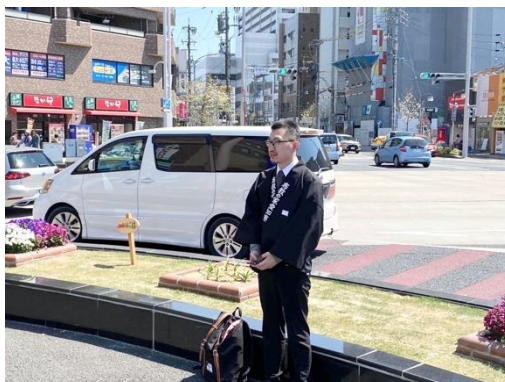
愛知寮 高橋悟志

親神様、教祖、祖霊様、いつもお見守りいただき、ありがとうございます。入寮して二週間が経ちました。周りの方々に感謝の絶えない日々を送っています。

にをいがけに歩く中で、九十年代の女性の方と出会いました。お声掛けさせてもらったところ、熱田新宮からの帰りでタクシーを呼びたくて困っておられました。代わりにタクシーを呼ばせてもらい、待つ間におさづけを取り次がせていただき、天理教のお話をさせていただきました。

その方にとっても感謝していただき、御供をお預かりしました。初めて教外の方におさづけをさせていただき、御供をいただいたので、とても印象的でした。人に感謝されることの喜びを強く感じさせていただきました。まだまだスタートラインに立つたばかりですが、勇んでにをいが

けに歩かせていただきたいと思います。





## インタビュー

白川 晴子 さん  
上杉 良子 さん

— 今月は柴田家の信仰についてお話を伺いたいと思います。柴田長助さん、トヨさんご夫妻の四女で姉の白川晴子さんと、五女で妹の上杉良子さん、よろしくお願いたします。

まず、どの様にして信仰に入られたのか、ご両親から聞いていらっしゃるのでしょうか？

【晴子】はい、当時柴田家は教会からも程近い根志越に住んでいました。三女の姉がまだ幼かったころ、頭に出来物ができ、それが頭全体に広がり膿んできたので包帯を巻いて、黒い頭巾を被せていた

そうです。その膿が目にも入りまつ毛が無くなるほどひどい状態になり、髪の毛も無くなってしまい困っていた時、祝梅の初代の半六先生にたずねていただいたと、聞いています。

【良子】先生は頭に出来物ができた姉の姿を見て、神様のお話を聞かせくださり、おさづけを取り次いで下さいました。そして頭に神様の「御紙」を貼って下さいました。それから父は教会に足を運ぶようになったそうです。母も毎日子供をおぶって教会に運んだそうです。そうしているうちに日に日に良くなり、やがて神様の「御紙」の下から髪の毛も生えてきて綺麗に御守護戴いたそうです。

【晴子】その後、昭和七年に生まれた兄が幼い頃、何を食べても消化できず食することもできなくなり医者から「小児麻痺」と言われました。小児麻痺という、今はポリオワクチンのおかげで感染はなくなりしましたが、当時子を持つ親にとっては恐ろしい病気で、初めは風邪の様な症状ですが、手や

足に麻痺が残ったり命にもかかわることもありました。足も立たないほど容態は悪くなっていましたが、教会の大祭にいただいたお赤飯を食べることができ、その後みるみる元気になったそうです。これは本当にありがたく思っていたようで、よく母が話して聞かせてくれました。

こうしていろんな節を見せていただきながら両親は信仰を深めていったようです。

— 以前ご両親は秋田に住んでいたようですが、そのころの事は何か聞いていらっしゃいますか？

【良子】両親とも秋田で生まれ母は縁あって長男である父に十五歳の時に嫁いだそうです。最初に長男が生まれたそうですが、育たず亡くなってしまったそうです。のちに母の姉が乳飲み子を産んで亡くなってしまい、姉の子を娘として引き取り、その子が長女となりました。そしてその後、次女三女と授かりました。

当時父は材木を扱う仕事をしていましたが木材を積んだイカダが流されてしまい父も大怪我をしました。命は助かりましたが多額の借財ができてしまい一銭もなく、逃げるようにして北海道へ渡りました。遠縁を頼って千歳にやってきて一家揃って暮らすようになったそうです。

【晴子】「お前が産まれた家は玄関にムシロを吊るした掘っ立て小屋だったんだよ。」と聞かされたことがあります。昭和四、五年ころ北海道に渡ってから私が生まれた昭和十三年頃まで、そんな家での暮らしが続いたようです。

【良子】千歳に来てから男三人そして私たち女二人が授かり、兄弟は八人になりました。秋田にいたころ長男は亡くなりましたが、千歳に来てからはこんな厳しい中でもみんな元気に育つことが出来たのは信仰のおかげだと思います。

— そうですね。それに教祖お言葉に「一人の子を預かって育ててやる

程、大きなすけはない」とあります。お姉さんの子供さんを自分の子供が育つお徳をいただかれたのではないのでしょうか。

【良子】そうかもしれませんね。それに信仰のおかげでだんだん運命が切り替わってきたのだと思います。

その後、父は靴の商売を始めることにしました。兄たちの協力もあつて商売は軌道に乗り、それで父は念願が叶い秋田に行つて親にも安心してもらえるようになったようです。

—そのように生活も落ち着いてからお母さんは修養科に入られていますね。

【晴子】どういう事情があつて修養科に入らせていただいたのかは今となっては分かりませんが、兄が単車に乗って崖に激突して骨盤を骨折する大怪我をしました。それが、ちょうど母が修養科を終了した時で「修養科のおかげで息

子は命を助けていただいた。」と母は後に話してくれました。

—きつと、お母さんは柴田家や子供さん達の事を思つて修養科にいかれたのですね。

【晴子】はい、父もまた、私達の幸せを何より願つてくれていました。その為にも信仰してもらいたいと言う思いが強かつたと思います。私が結婚をして室蘭に住むことになった時に、家までお社を背負つて持つて来てくれました。そこに親神様をお祀りさせていただくことができ、いつも信仰を中心に生活させていただくことができました。

今、長い歳月を振り返つてみると、信仰のお陰で自然に良い様に良い様になって来たなあ...と思います。本当に守つていただいて来ました。ありがとうございます。

貴重なお話ありがとうございます。柴田長助さんトヨさんご夫妻は祝梅の教会の初代、二代、三代に勤めてくださいました。そし

て今も、子供さんお孫さん達が教会を支え「ようぼく」として親神様の御用をおつとめ下さつています。

諭達の中に「教祖お一人から始まつたこの道を、先人はひながたを心の頼りとして懸命に通ひ、私たちが繋いでくださった。その信仰を受け継ぎ、親から子、子から孫へと引き継いでいく一歩一歩の積み重ねが、末代へと続く道となるのである。」と、あります。

これからお元気で末代への道を行んでいただきたいと思ひます。ありがとうございます。



夕張団おつとめ総会 報告

五月二十一日夕張大教会で少年会夕張団おつとめ総会が行われました。毎年の開催が恒例の総会もコロナ禍となつて開催出来ません

でしたが、三年ぶりの開催となりました。

他の隊と合同で九下り目から十二下り目を、祝梅からは少年会員五名、育成会員二名がつとめました。練習を通して子供の伸びようとする力に感動！みんな練習のたびにどんどん上達しました。総会当日はおつとめ衣を付け、一生懸命つとめる子供達の姿に胸が一杯に...これからも、子供達の成長を楽しみに見守つていきたいと思ひます。



↑全体写真

↓鳴物をつとめる少年会員





## 『いんねん』

◎先日、知人よりこんな話を聞いた。

東京で学ぶ医大生の倅から電話があり  
「教授が、親三世代廻り

中気の人がお前の家にいたら内科を選べ。  
外科を選ぶと五十代には

手先が震えて手術ができなくなる。

中気の人がいたか、いないか調べて  
進路を決めなさい」と教えられたという。

○そういえば、確かこの話の通り

親代々の家系をよく調べれば

誰にでも自分のいんねんが解る。

「暗い」いんねんあれば、いんねんに

泣かない内に善い行を積み重ねて

「明るい」いんねんに切りかえよう。



あどがき

五年以上前のことになりましたが、今回のインタビューに登場した白川晴子さんが月次祭の前日、いつものようにひのきしんをして下さっていました。しかし、吐き気とめまいで具合が悪くなり病院に行くことになり、診察していただいたら脳梗塞が見つかって、そのまま直ぐに入院になったのです。

ところが、その翌月のやっぱり月次祭の前日に今度は妹の上杉良子さんが頭を強く打ち、病院で診察してもらったことになったのです。幸いにも脳のほうに異常はなく事なきを得ました。

二人とも月次祭の前日、九日に続けて同じ病院にお世話になったこと、そしてその日の朝づとめの時のおふでさきのお歌が偶然、同じページを拝読させていただいていたのです。

それよりもひねた木からたんと

ていりひきつけあとのもよふを

七一十九

(年限の経った木から、だんだんと手入れをしてください、一層たくさんのようぼくが育つように段取りをする。)

にちくに月日をもわくふかくある

をなじところに二ほん三ぼん

七一二十

(一軒の家族、親戚の中から親神の望むようぼくが二人も三人も出てくる場合がある。丹精を尽くして、真実の種を蒔いて育てていくことが肝心である。)

これはお二人の身上には親神様の子供可愛いゆえの深い思し召しがあったのだと思います。

お二人はコロナ禍の中も、ずっと月次祭の前日の九日からひのきしんして下さっています。これからも元気に教会に来ていただいて誠真実の姿を伝えていただきたいと思います。

そして六月六日は高橋美津志三代会長の命日でした。前会長がせっせと野菜作りをされていたころ、自然農のお話をしてくださいました。ただ今、模索しながらも自然農に挑戦しています。焦らず、土の持つ力、野菜の持つ力を信じて育てる自然農が前会長の姿と重なります。前会長の作ったかぼちゃ美味しかったです。今年かぼちゃ作り頑張ります。(多)